
占術師速水丈太郎 横須賀の海にて

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占術師速水丈太郎 横須賀の海にて

【Nコード】

N5369A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

海上自衛隊の護衛艦を襲う怪異。その解決の為に呼ばれた一人の若い占い師。彼はどうかやって事件を解決していくか。これもシリーズものです。海とタロットの世界をお楽しみ下さい。

第一章

占術師速水丈太郎 横須賀の海にて

その艦は就航して間もない艦だった。その任務にあたったのは本当に偶然のことからだった。

「まさかいきなり仕事とはな」

艦橋で厳しい顔の中年の男が苦い顔をしていた。眼鏡と白髪頭が印象的である。

「暫くは試験航海ばかりだと思っていたのに」

見れば紫色の作業服を身に纏っている。会場自体隊の幹部自衛官の作業服であった。

海上自衛隊においては作業服は階級によって色分けされている。

海士、昔で言う兵士と下士官は青色の作業服、そして幹部、昔で言う士官は紫色である。作業服によっておおまかな階級がわかるようになっていたのである。階級社会である自衛隊ならではの服装であった。

見ればその胸には金色の線が四つ入っている。これは彼が一等海佐であることを示していた。海上自衛隊においてはこの階級は護衛艦等の艦長を務めたりするかなり高い階級である。そのことから彼がこの艦の艦長であることがわかる。

「まあ仕方ありませんね」

その隣にいる線が三つの階級の男が彼に声をかけた。これは二等海佐のものである。細く、引き締まった顔をしている。年齢は艦長より少し下といったところか。少し背は低いが全体的に悪い感じはしない。

「他に停泊している艦もありませんでしたし」

「困ったことだ」

艦長はそれを聞いて呟いた。

「まだ色々と整備しなくてはいいけないところがあるのにな」

「しかしものは考えようでは？」

若い、眼鏡をかけた男が艦長に声をかけてきた。背は結構高い。だが何処か頼りなげである。

見れば階級は太い線が一本に細い線がもう一本ある。階級は二等海尉であった。

「これも訓練と考えれば」

「航海長」

艦長がそれを聞いて声を曇らせた。

「今回の仕事はそんなに楽な仕事ではないぞ」

彼は曇らせた声のまま言った。

「救助はな。やったことはあるか」

「いえ」

その若い航海長は答えた。

「まだありませんが」

「訓練の上だけだな」

「はい」

航海長はまた答えた。

「それでよく言えたものだ。もっとも私も一回やったただけだが」

「そうなんですか」

「大抵こうした仕事は海上保安庁がするからな」

艦長は今度は副長に答えた。

「今みたいに保安庁もたまたま出払っていた。それは二十年程前のことだ」

「そんな前なのですか」

「遠洋航海から帰って配属されてすぐだった」

艦長は述べた。

海上自衛隊では江田島で幹部としての教育を行う。それは大学卒業後及び防衛大学出身者は一年となっている。その一年の教育機関の後は総仕上げとして半年の遠洋航海に出発する。それが終わってようやく一人前の幹部自衛官として認められるのである。これは海

軍の頃からの伝統であった。

「呉でな。座礁した小船を救助した」

「そうだったのですか」

「それから全然なかった。ましてやここではな」

東京湾である。横須賀に停泊する艦隊の受け持ち海域である。だから彼等は今ここに出っ張っていたのである。

「まさかあるとは思わなかった。それでその客船だが」

「はい」

艦橋の端で色々と作業をしていた白い顔の青年が顔を上げた。

「今どういった状況だ」

「決して思わしくはないようです」

その青年は答えた。見れば太い線が一本の紫の服を着ている。階級は三等海尉である。

「思わしくないのか」

「はい。火災は全く鎮静化する見込みはないとのことですよ」

「厄介だな」

艦長はそれを聞いて顔を暗くさせた。

「応急長に連絡してくれ」

「はい」

若い士官はまた答えた。

「応急班は全員今から準備にかかるようにと。消火活動だ」

「わかりました」

「そして通信士」

艦長はまた若い士官に声をかけた。

「はい」

「他の者にも準備はさせておくようにな。厄介な仕事になるかも知れない」

「わかりました」

通信士はそれを受けて艦内に指示を出す。

「総員消火活動用意」

それが下ると一気に艦内に緊張が走る。皆顔が変わった。

「そろそろだな」

艦長が前を見ながら言った。

「その客船が見えてくるのは」

「はい」

艦橋の横から声がした。

「見えました」

見張員から声がかかってきた。

「煙吹いています。かなり燃えてます」

「そうか」

「場所は？」

副長が見張員に問うた。

「少し左です」

「よし、取り舵だ」

「とーりーかーりーじ」

それを受けて航海長が左手を大きく旋回させる。操舵手がそれを見て舵を左に切った。

こうして艦は左に向かう。そして暫くしてその客船を発見した。

「あれだな」

「はい」

副長は艦長の言葉に頷いた。

「間違いありませんね」

見れば燃えていた。そして高い煙を吹き上げている。

「どうやら間に合ったようですが」

「だが急がなければならぬ。総員に指示を出しておいて正解だった」

「はい」

「すぐに接舷する」

艦長は指示を出した。

「そして総員で消火及び救助活動にあたるぞ。いいな」

「了解」

こうして消火及び救助活動が開始された。まずは艦長の命令通り接舷される。そしてそこからホースや様々な機具を持った自衛官達が次々と客船に入る。そしてすぐに活動を開始した。

「自衛隊の方ですね」

「はい」

その中の一人が客船の船員の言葉に応える。船員はそれを聞いて急に救われたような顔になった。

「よかった、間に合っただんですね」

「何か大変だったみたいです」

「ええ。とにかく厄介な火でして」

彼は説明をはじめた。

「消えたとおもったらまた出て来るんですよ」

「また!?!」

「はい、とにかく妙で」

その船員は話を続けた。

「そもそも出火原因もはっきりしませんし」

「はあ」

「食堂で出たと思ったらすぐに消えて甲板で出たり。今は艦橋です」

「艦橋で」
「出たり消えたりしているといった感じなんです。とにかく妙な火で」

「そうなのですか」

「それでも貴方達が来てくれたのは非常に有り難いです。それでは宜しく願いますね」

「はい」

こうしてこの艦の自衛官達は消火活動及び救助活動をはじめた。だがここですぐに異変が起こった。

艦橋の火が消えたのである。そして今度はエンジンであった。

「艦橋の火が消えた?」

艦長はそれを聞いて眉を顰めさせた。

「はい。そして今度はエンジンルームで出火だそうです」

「消火活動の前に消えたのか」

「はい。どういうわけか急に」

通信士がそう言う。

「今火が消えた原因を調査中ですが」

「それは後でいいな。まずはエンジンルームの火だ」

「はい」

「そちらを消してからゆっくりと調べよう、いいな」

「わかりました」

しかしまた異変が起こった。そのエンジンルームの火が完全に消えたのだ。

「またか」

「今度は完全に消えたようです」

そう連絡があった。

「今は負傷者の救助に専念していますが」

「そうだな。主軸はそこに置こう」

それは艦長もよしとした。

「機関長他数人の先任海曹を調査に回して総員救助活動にあたる。
いいな」

「わかりました」

こうして救助活動に主軸が置かれた。そちらは順調に終わり数時間もすれば終わった。こうして一連の活動はとりあえずは終わった。

「有り難うございます」

客船の船長は護衛艦の艦橋まで行き艦長に謝礼を述べた。

「もう少しで取り返しをつかないところになるところでした」

「いえ、礼には及びません」

だが艦長はその礼をよいとした。

「これが我々の仕事ですから」

「仕事」

「はい。国民に何かあれば、我が国の領海内で何かあればすぐに動くのが我々の仕事なのです。ですからこれは当然のことなのです」

「そうなのですか」

「はい。ですから御気になさることなく」

こう言って礼をよしとした。だがこの船長と船員、客達から深い謝礼が送られた。

このことはマスコミに大々的に取り上げられた。そして艦長とこの艦の乗組員達は自衛隊においても話題となった。多くの人命と船を救ったことで彼等は一躍人気者となったのである。

だがそれでも艦長も乗組員達も気は晴れなかった。それはこの艦に原因があった。

第二章

どういうわけかこの救助から艦に異変が起こるようになったのだ。例えば人員の数であった。

「おい、またか」

「ああ」

先任海曹達が外出簿や外出札を見ながら首を傾げていた。先任海曹とは下士官の中でもベテランの者達であり言うならば艦の本当の意味での主達である。彼等が実際に艦を動かしていると言っても過言ではない。そうした意味で非常に力のある者達だ。その彼等が首を傾げていたのである。

ここは先任海曹室である。そこで彼等は皆首を傾げていたのだ。

「数が合わない。やっぱり一人多い」

「今日は皆出ているな」

「間違いない」

一人が外出簿を見て言った。

「きっちり全員出ている」

「入って来ている奴もいない。やっぱりおかしいぞ」

「いないというのならわかるんだけどな。どういうことなんだ」

最近この艦では人が一人多いとされているのだ。少ないのではない。人員点呼をすれば全員いる。だが一人多いのである。しかし知らない顔はいない。実に不思議なことであった。

不思議なことはそれだけではなかった。深夜消灯した後のことである。

食堂の灯りが点いている。だがそれが急に消えるのだ。

その逆もある。電気員達が調べても異常はない。だがそれがしょっちゅうあるのである。

米が減っていたりすることもあった。これはまず給養員達が疑われた。横流しをしているのではないかと。

「じゃあ調べてみればいい」

それを聞いた給養員長の言葉であった。彼はそんなことは有り得ないとさえ言った。

「もしそんなことがあったら自衛隊を辞めてやる」

彼は自分の部下達を信じていた。それに維持もあった。だからこそこう言ったのである。

結果は白だった。やはり何もなかった。だが米がなくなったのは事実であった。その他にも多くの食糧がなくなっていた。だがこれも白であった。

怪異はさらに続いた。士官室の書類が風もないのに突如として浮かび上がる。そして左右に舞う。所謂ポルターガイスト現象である。海上自衛隊という組織は案外狭いものである。従って噂が広まるのも早い。これが横須賀、いや舞鶴や呉、佐世保等にまで話が伝わるのにそう時間はかからなかった。何時の間にかこの艦は客船を救助した英雄ではなく怪奇現象ばかり起こる無気味な艦となってしまうっていた。

「それで私が呼ばれたわけですね」

この艦が停泊している横須賀の海上自衛隊の港に一人の男が来ていた。

「はい」

それを若い女性自衛官が応対する。黒いスーツの制服に膝が隠れるスカートを身に纏っている。腕のところには太い線が二本ある。それを見ると彼女が一等海尉であることがわかる。細長い卵型の顔に後ろで束ねた黒い髪がよく似合っている。少し垂れていて切れ長の目が印象的である。

「何しろ我々はこうしたことは対象外でして」

「でしうね」

男はその言葉に対して頷いた。

「自衛隊の仕事はあくまで物理的なものを対象していますから」

「はい」

その女性自衛官は彼の言葉に頷いた。なお海上自衛隊では女性自衛官のことをウェーブと呼ぶ。陸上自衛隊ではワック、航空自衛隊ではワッフとなっている。

「こうしたことは話だけは多いのですが」

「そうらしいですね」

「御存知でしたか」

「ええ、まあ」

男はそれに対して頷いた。見れば鮮やかな青いスーツとネクタイを着ている。そしてその上からその青いスーツと映える丈の長い白いコートを羽織っている。だがそれは裏地は深紅であり何処かマントを思わせる。

顔も白く何処か日本人離れた色であった。雪か雲の様に白い。だが髪は黒くそれで顔の左半分を完全に覆っていた。その黒い二重の少し小さな目でウェーブを見ていた。そしてその薄い唇で話をしていた。整ってはいるが何処か謎めいた男であった。

「昔から自衛隊にはこうした話はつきものですからね」

男は答えた。

「軍の頃から」

「よく御存知のようですね」

「職業柄ね」

男はこう答えた。

「こういう仕事をしていると。よく聞くことになります」

「占い師でしたね」

「はい」

男はここでうつすらと笑った。本人はにこやかに笑ったつもりだったのかも知れないがその笑みは何処か謎を含んだものであった。

「タロットで」

「タロット」

「トランプに似たものです」

聞き慣れない単語を聞いて目をパチクリさせるウェーブにこう答

えた。

「カードを使って占うのですよ」

「そうなのですか」

「今度貴女も占って差し上げましょうか」

「時間があれば」

「占い方も色々でしてね。一枚で占うこともできます」

「一枚で」

「何でしたら今ここで占って差し上げてても宜しいですよ」

彼はコンクリートの波止場を歩きながらこう言った。見れば左右には停泊している船舶が並んでいる。後ろには自衛隊の建物があった。どれもかなり大きい。その大きさと数からここがかなり大きい基地であるとわかる。事実ここは海上自衛隊の基地の中でも最大規模の場所の一つである。

「何が宜しいですか」

「何と急に言われましても」

彼女は少し戸惑った。

「そうですね」

「当然恋占いもできますが」

「恋占い」

それを聞いたウェーブの表情が少し変わった。

「はい。占いの定番ですから」

「それじゃあ」

彼女はそれを聞いて占ってもらおう気持ちになった。彼に頼んできた。

「今の交際について」

「わかりました。それでは」

それに頷くとサッと懷から何かを取り出した。彼はまずそれを見た。

「ふむ」

見ればそれは一枚のカードであった。彼はそれを見て頷いていた。

「それがタロットですね」

「ええ」

彼は答える。

「御覧になれますか」

「はい」

彼女はその問いに答えた。すると彼はそれに頷いてカードを彼女に対して見せた。

「どうぞ」

そこには太陽が描かれていた。そしてその周りには人がいる。見れば晴れやかな顔をしていた。

「太陽」

「そう、太陽です」

彼はにこりと笑って答えた。

「これは非常にいいカードでして」

「そうなのですか」

「これは私の予想ですが」

「何でしょうか」

「貴女は最近今付き合っておられる方と喧嘩されましたね」

「はい、そうです」

彼女はそれを認めた。

「ちょっと。詰まらないいざかいで」

「そうですね。だからこのカードが出たのです」

彼は目で頷きながらこう述べた。

「ですがこのカードが出たということは安心されています」

「何故ですか？」

「太陽は毎日昇りますね」

「ええ」

「沈んで浮き上がって。即ち復活です」

彼は述べた。

「つまり仲直りできるということです」

「それは本当ですか!？」

それを聞いた途端顔が明るくなった。

「はい」

彼はそれにまた頷いて答えた。

「私の占いは外れたことはありません。そして今もまた」

「わかりました。それじゃあ今日仕事が終わったら会って来ます」

「早いですね、それはまた」

「思い立ったが吉日ですから」

声まで明るくなっていった。

「何か元気が出て来ました。有り難うございます」

そう言ってここで左手を見た。彼はそれを見てあることに気付いた。

「あの」

「何でしょうか」

ウェーブの声はさらに明るさを増していた。

「今左手を御覧になりましたね」

「ええ、それが何か」

「いえ」

この横須賀の基地の港のすぐ隣にとある球団の宿舍と二軍の練習場があるのである。同じ神奈川県にある横浜ベイスターズの宿舍でありその二軍である湘南シーレックスの練習場である。彼女は今そこを見て楽しそうに声をあげたのである。

だが彼女はそれには気付いていなかった。彼はそれであえて話をぼかしてきた。

「昨日のベイスターズの試合はよかったですね」

「はい」

やはり返事も元気のいいものであった。

「最後の最後で勝ちました」

「まあ今の巨人は最後がお粗末ですからね。いいことです」

「そうですね。やっぱり巨人は負けないと」

「はい」

彼はそれには同意であった。実は彼も横浜ファンなのである。

「地元の球団が勝って嬉しいですか」

「実は私は金沢出身なんですか」

「そうですか」

自衛隊は全国から人が集まる。だから何処に配属されるかわからないのである。

「それでも子供の頃から横浜ファンなんですよ」

「横浜大洋ホエールズの時代からですね」

「懐かしいですね」

「私もそうですから」

彼も自分がファンであることをここで認めた。

「ここ数年あれでしたけれど今年は頑張ってますね」

「本当に。もうあの時は」

どうしようもない程弱かったあの時を思い出して二人は話をしていた。

「もう笑うしかありませんでしたから」

「ええ」

「けれど今は違いますし。ほら、あの若いピッチャー」

「ええと」

と言われても何人かいる。咄嗟には思い出せない。

とりあえず見当をつけてみることにした。ふとした動作で口に出してみる。

「あのストッパーの」

「そう、彼です。彼がいるから勝てるんですよね」

「そうですね」

誰が彼氏なのかここでわかった。だがやはり彼女は気付いていなかった。

そんな話をしながら埠頭を進む。そしてある艦の横にやって来た。「この艦です」

「この艦ですか」

言われて顔を上げる。見ればかなり大きい艦であった。

「またえらく大きいですね」

「最新鋭で。今自衛隊で最も新しい艦です」

「はあ」

近年海上自衛隊では艦艇は大型化している。その結果としてこの艦もまた大型なのである。だが見ればここにはこの艦よりも大きな艦があった。

「まあイージス艦よりは小さいですが」

「イージス艦」

「あそこに停泊している艦です」

彼女はそう言ってその大きな艦を指差した。見ればかなり独特のシルエットを持っている。

「あれがイージス艦ですか」

「ええ。やはりあれが護衛艦の中では最も大きいですね」

「そうなのですか」

「それでもこの艦は大きいでしょう」

「はい」

彼はその言葉に頷いた。

「ちよっとこんな大きな船はそうそう見たことがありませんね」

「でしょうね。中も凄いですよ」

どうも海上自衛隊にとっては自慢の艦であるらしい。語る言葉が説明口調でありしかも誇らしげであった。先程の恋と野球の話とはまた別の意味で乗っていた。

「ただ、守秘義務は守って下さいね」

「はい」

彼はその言葉に頷いた。

「確かに捜査としてかなり細かい部分まで見てもらうことになるでしょうが」

「はい」

「そのことについて他言なさないで下さい。宜しいですね」

「わかっています。これも契約ですからね」

彼は応えた。

「決して口外はしませんので。御安心下さい」

実は彼はそういう約束でこの仕事を引き受けたのである。

自衛隊は国防上止むを得ない理由でそうした守秘義務がとりわけ多く存在する。とりわけ兵器である艦艇にはそれが顕著である。だからこそ契約の際こうした約束が為されたのである。

「では」

「はい」

彼は頷いた。そして案内されてラッタルを登る。入口の舷門で挨拶を受けそのまま艦内に案内される。そして艦橋まで導かれたのであった。

第三章

「はじめまして」

彼は艦長達を前にして挨拶をした。

「はい」

艦長達はこの時先に挨拶されてしまったことを内心悔やんだ。自衛隊においては階級が下の方が挨拶するのが決まりである。なお民間人に対してはあえてこちらから先に礼をするというのが暗黙の決まりのようになっていく。これはかつての軍にいささか見られた傲慢さを払拭したいのと文民統制をあらわす為だとも言われている。

「速水丈太郎さんですね」

「はい」

彼は答えた。

「その通りです」

「こちらに来て頂き感謝します」

艦長は乗組員達を代表して挨拶をした。

「それでは早速話に入りたいのですが」

「はい」

「士官室までどうぞ」

「わかりました」

本来なら艦長室で話となるのだろうがここで艦長はあえて士官室に速水を案内した。これには事情があった。

こうして速水は士官室に入った、士官室といっても愛想がないと言えば愛想のない只のホールの様な部屋であった。海上自衛隊という組織は華美を好まない。変に華美にすればそれこそマスコミから何を言われるかわからないからだ。速水はその中の一席を薦められた。

「どうぞ」

「はい」

薦められるまま席に着く。そしてまずはコーヒーを薦められた。

「どうぞ」

「有り難うございます」

海上自衛隊は海軍の頃からコーヒーが主流となっている。彼はコーヒーを飲みながら艦長から話を聞いていた。

「おおよそはもう御聞きだと思えますが」

「はい」

彼は答えた。

「この艦では近頃奇妙なことばかり起こってしまして」

「そのようですね」

彼はコーヒーを置いてそれに応えた。

「何でも人が一人多いとか物資が減っていたりするとか」

「はい」

「つまり怪奇現象が頻発していると」

「簡単に言えばそうなります」

艦長はそれを認めた。

「そのせいで乗員の士気にも影響が出ておりまして」

「はい」

「近頃では航海にも支障をきたす程なのです。この港に停泊したまままで」

「海にも出られないのですか」

「お恥ずかしいことですが。只でさえこの横須賀は忙しいというのに」

横須賀は海上自衛隊の港の中では最大である。その結果ここに停泊している艦艇も出港が多いのである。当然この艦もそうである。だが今はその怪奇現象の為に動くに動けない状況となっているのだ。

「困ったことです」

「そしてそれを解決する為に私が呼ばれたのですね」

「その通りです」

艦長は応えた。

「日本で有数の占い師にして退魔師である貴方に」

「はい」

「どうかこの艦の怪奇現象の原因を明かして解決してもらいたいのです」

彼は言った。

「宜しいでしょうか」

「はい」

速水は頷いた。

「その為に私はここまで来ましたから」

「おお」

「是非共やらせて下さい。お金はもう頂いておりますし」

実はこの仕事で彼は一千万単位の報酬を防衛庁から貰っている。

話が出ると同時にそれだけの額が出て来て彼の方が驚いた位である。以前の軍との違いを明確にしたい為か防衛庁という組織はとにかく悪い噂を嫌う。それを払拭する為には多少の金銭的な無理は厭わないところがある。さらに民間人に対しては極端に低姿勢である。その為いきなり巨額の報酬を提示してきたのである。なお当然であるがこれの皺寄せはあり陸上自衛隊の居住設備はお世辞にもいいとは言えない。改善されてきているとはいえそれでもまだかなり悪いのは言うまでもない。

「有り難うございます」

艦長はそれを聞いて頭を下げた。まだ二十代かそこいらのしがな
い占い師に対する態度ではなかった。これには速水は内心かなり驚
いていた。

「あの」

「はい」

「そこまでされなくてもよいですから」

彼はやまりかねてこう言った。

「私もこれが仕事ですし。ビジネスパートナーですから」

「はあ」

「気楽にとはいかなくてもお互い形式ばったことは抜きにしましょう。まあリラックスでもしながら」

「わかりました。では早速」

「早速？」

「資料を。補給長」

「はい」

眼鏡をかけた銀行員の様な風貌の若い士官が進み出てきた。階級を見れば一等海尉であった。艦の補給や経理、そして書類のことに関する責任者である。

「こちらです」

その補給長が速水に一冊のファイルを差し出してきた。見ればかなりの分厚さである。

「これが一連の事件に関する資料ですか」

「はい」

艦長は答えた。

「どうぞ御覧になって下さい」

「はい」

速水はそれを受けて資料を読みはじめた。そして読み進むうちに何点か不審な点に気付いた。

「あの」

そして艦長に声をかけてきた。

「何でしょうか」

「客船の救助に向かうまでは何も起こっていないのですね」

「そういえば」

これには艦長だけでなく他の幹部達もハツとした。

「確かにその通りです」

そして艦長もそれを認めた。

「新造艦であるせいかも知れませんが。それまでは何もなかったです」

「やはり」

速水はそれを聞いて頷いた。そしてさらに尋ねた。

「その客船の災害に関する資料はありますか」

「補給長」

「はい」

それを受けて先程の補給長がまた席を立った。

「あれを」

「わかりました」

そして補給長はもう一冊ファイルを出してきた。速水はそれにも目を通した。

「何かわかりますか」

「この客船ですけれど」

「はい」

「どうもおかしい事故ですね」

「そう思われますか」

「はい。この火災はどう見ても普通の火災ではありません」

「では一体」

「ちょっと待って下さい」

彼はこう言うのと右手を懐に入れた。

「今占ってみますので」

そしてそこから一枚のタロットカードを取り出した。それを見た彼の顔が急激に曇っていった。

「やはり」

「何かあるのですか」

「その客船ですが」

「はい」

「どうやらよからぬものが入り憑いていたようです」

「取り憑く」

「そうです」

速水は答えた。

「これを御覧下さい」

そう言つて艦長達にそのタロットカードを見せた。そこには一人の道化が描かれていた。何処かランプのジョーカーに似ていた。

「それは」

「愚者の逆です」

「愚者の逆」

「しつこい相手につきまとわれている場合に出たりします」

「しつこい相手ですか」

「そう、この場合は人ならざる者です」

彼はこう説明した。

「といますと幽霊か何かで」

航海長が尋ねてきた。海上自衛隊は海軍の頃からこうした話には事欠かない。事実江田島の幹部候補生学校、かつての海軍兵学校にはそうした話は山程ある。

「詳しいことはまだはつきりしませんが」

速水は即答を避けた。

「そうですか」

「少なくとも怪しげな存在なのは事実でしょう」

「そうですか」

「詳しいことはこれから調べますが」

「はい」

「用心はして下さい。これからも色々起こるでしょうから」

「わかりました」

こうして士官室での話はとりあえずは終わった。速水は空いていた部屋の一室に案内された。

第四章

「本来は士官用の寝室ですが」

案内してくれた補給長が説明してくれた。

「たまたま空いていまして。どうぞお使い下さい」

「一人でですか」

「はい」

補給長は頷いて答えた。

「本来ならここは四人部屋なのですが」

「はあ」

見れば机や手洗いまである。灰色に塗られた金属の壁は変わりはないが下士官や兵士が使う部屋に比べれば設備は遥かにいいらしい。

「どうぞお使い下さい」

「わかりました。では」

見ればベッド等もう整えられている。事前に準備をしてくれたらしい。かなり準備がいい。ここは流石と言えた。

補給長が部屋を後にすると彼はすぐに机に座りファイルをもう一度読みはじめた。まずは客船に関するものからである。

読むと面白いことがわかった。どうやらあの客船で起こっていたのは火災だけではないようだ。

医療関係の資料もそこにはあった。そこを読むと実に病人が多いのだ。しかも原因不明の倦怠感や疲労感等である。彼はそこに異変を見ていた。

「ここかな」

彼等の共通点としては船の中にいるというだけで身体が疲れてくるとのことだ。そしてそれは船から降りるとそれがなおる。これの繰り返しなのである。しかも精神的なものではないようだ。彼はここに注目したのである。

そしてそのファイルを細かい場所まで読む。他にもおかしな点があった。

夜停泊中に霧が急に出て来る。航海中にもだ。そしてそれは客船の周りだけだ。

また客船でも人が多かったり何かが消えていた。今この護衛艦で起こっていることだ。これは同じであつた。やはりおかしいことであつた。

結果として客船には何かがいた、そうした結論になった。そしてそれはこの護衛艦に移つたのではないのか、速水は同じ現象が起きていることに対してそう考えるようになっていた。

「即断は止めますか」

だが彼はすぐに答えを出すことは止めた。

「まずは色々と調べないと」

そう言つてまずはファイルを閉じた。そして部屋を出て舷門に向かった。そこでは当直士官と下士官、そして当直海士がいた。

「どちらに行かれるのですか」

「外の空気を吸おうと思ひまして」

彼は答えた。

「艦の外に出て宜しいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

当直士官である応急長がそれに答えた。見れば階級は一等海尉である丸い顔に同じく丸い眼鏡をかけている。何処か親しみ易い顔であつた。

「それでしたらPXに行かれるといいです」

「PX」

「売店のことですよ」

今度は当直下士官が教えてくれた。

「ここの売店はいいものが揃つていましてね」

「そうなんですか」

「本も売っていますし行かれるといいですよ」

「お茶も飲めますしね」

「そうですか。それじゃあ」

彼はそれを聞いてすぐに舷門を出た。

「ちよつと行って来ます」

「閉まるのは早いからそれには氣を着けて下さいね」

「はい」

そして艦から出てそのままPXに向かった。入ってみれば確かにかなり大きい。しかも言われた通り本屋まであった。見れば思ったより色々な本が置かれている。

「へえ、これは凄い」

下手な本屋より色々な本があった。漫画もあれば雑誌もある。彼はそれを次々に手にとってカウンターに向かった。金額は通常より一割程少なかった。

「定価じゃないんですね」

「ここではそうなんですよ」

店員を務めている中年の女性がこう答えた。

「自衛隊の施設の中では普通の品物より一割低いんです」

「やっぱりそれも福利厚生の一環なんですか」

「はい、そうです」

店員さんはまた答えた。

「まあ一割程度ですが」

「いや、それでもいいですよ」

速水は笑顔で返した。

「それだけお金が浮きますから。それでコーヒーの一本でも買えますしね」

そう話しながら本を買った。そして今度は喫茶店に入った。そこで本を読みながらコーヒーを飲むのであった。

「快適なものですね」

思ったよりこうした施設が充実しているのには内心驚いていた。海上自衛隊といえど質素な組織だと思っていたからである。だがど

うしてこうしたところは充実しているのだと思った。

「今度ベースに行かないか」

「おっ、いいな」

だがここで廊下から声が聞こえてきた。

「ベース？」

「アメリカ軍の基地のことですよ」

丁度コーヒーの後で気が向いて頼んだサンドイッチを持って来てくれた店のおじさんが説明してくれた。

「ああ、横須賀の基地の」

「はい」

横須賀にいるのは海上自衛隊だけではないのである。自衛隊の施設としては防衛大学校もあり、そしてアメリカ海軍もいる。ベースとはそのアメリカ海軍の基地のことなのである。

「そこはまた凄く広くて」

「ここよりもですか」

「こんなところ比べ物になりませんよ」

おじさんは笑ってこう説明してくれた。

「そんなに」

「まるで違いますよ。土日に行けばね」

「はい」

「千円位で食べ放題があるしお酒も安い」

「お酒も」

それを聞いた速水の目の色が変わった。変わったように見えるのは外から見えている右目だけであつたが。

「はい。それも凄く安いんですよ」

「何かいいところですね」

「少なくともここなんかとじゃ比べ物になりませんよ。そうしたところはやっぱりアメちゃんは凄いですね」

「向こうは軍人の待遇がいいんですよ」

「それだけじゃありませんね」

おじさんはまた言う。

「何か。そうしたことに対する考え方が全然違うんでしょね。設備とかの」

「そうなのですか」

そんな話を聞きながらサンドイッチを食べた。そしてコーヒーを飲み干すと店を後にした。買った本を抱えながらPXを後にして艦に戻った。

艦に戻るとすぐに艦長から声があった。食事はどうするのかと。

「食事!？」

「はい」

見ればまだ四時半である。彼は時計を見て首を傾げさせた。

「早いのではないですか?それとも準備ですか?」

「いえ、今から食事ですけど」

だが艦長はこう答えた。

「今から」

「はい、自衛隊の夕食はいつもこの時間なのです」

「四時半に」

「時間でそう決められていまして。どうされますか」

「そうですね」

彼はここでさっきサンドイッチを食べたことを後悔した。

「今日はいいです」

「そうですね」

「先程サンドイッチをいただきましたから。お腹がふくれていました」

「わかりました。ではいいですね」

「はい」

こうして彼はそのまま部屋に戻った。そして本を読んだ後でまたファイルに目を通した。その後でノートとペンを取り出し何かを書きはじめた。メモの様であった。

時折ファイルを見ながら書いていく。そして何やら色々と考え事

をしているようであった。

それが終わるとノートもファイルも閉じてしまった。そして懷からまたタロットカードを取り出した。今度は二十二枚全てであった。タロットは大アルカナと小アルカナの二種類がある。彼は今回そのうちの大アルカナ二十二枚を持って来たのである。これはタロットカードの中でもよく知られているもので占いでもこちらを使うものがポピュラーなものとなっている。

彼はそれを取り出すと机の上に置いた。そしておもむろに言った。

「行け」

それを聞くとカードは一斉に舞い上がった。そしてそれは部屋の扉を潜り抜けて艦内へ出て行く。その瞬間に放送が聞こえてきた。

「消灯」

海上自衛隊では消灯は夜の十時である。それ以後は当直員以外は休息に入る。丁度真っ暗闇で赤い非常灯以外の光がなくなった艦内をカード達が舞って言った。

速水はその間身じろぎもしない。ただ机に座っているだけである。そしてそこで何かを見ていた。

「ふん」

タロットが舞うところが彼には見えていた。そしてそれは二十二あった。彼はその二十二の光景を頭の中に全て見ていたのである。それで艦内を見回っていた。

だが何もなかった。とりあえず彼の欲しい情報はそこにはなかった。彼はそれを確認して今度は甲板を見ることにした。

カード達は今度は甲板の上を飛び回った。艦橋部分にも向かう。こうして今度はその辺りを見回った。

するとそこであることに気付いた。それは艦首部分にあった。深い紫の世界の中であった。彼はそこに出て辺りを見回した。

第五章

紫の世界の他は夜の闇に沈んだ艦が並んでいるだけであった。遠くに横須賀の夜の光が見えるがそれ以外は何もない。ただ波の音が聞こえるだけであった。速水は今その中で魔性の住人を探していた。「!？」

何やら霧があった。そしてそれはユラユラと動いている。まるで生き物の様に。

「あれか」

彼はそこに何かを見た。すぐにカード達に隠れる様に指示を出し自らも立ち上がった。そしてコートを羽織って艦首に向かうのであった。

艦首に行くとそこには霧がいた。ゆらゆらと生き物の様に動く様はタロットカードが見せてくれたものと同じであった。

「そこにいたのか」

「気付いたようだな」

霧は声を発した。そして彼に声をかけてきた。

「気付かない筈がないだろう？」

速水は不敵な笑みを浮かべてこう述べた。

「これだけ怪しげなことをされていてはな」

「だからこの艦に呼ばれたのか」

「ああ」

彼は答えた。

「占い師の速水丈太郎という。覚えておいてくれ」

「占い師か」

霧はそれを聞いてふと呟く様に声を出した。

「見たところ占い師ではない様だが」

「勿論只の占い師ではないさ」

速水は言葉を返した。

「退魔師でもある。覚えておいてくれ」

「退魔師か」

霧はそれを聞いて面白そうに声をあげた。

「また性懲りもなく」

「性懲りもなく、か」

速水はその言葉に反応した。

「ということは以前にも私の同業者と会ったことがあるな」

「その通り」

霧はまた答えた。

「過去何度もな。私を消そうとやって来た」

「ほう」

「だが全て返り討ちにしてやったのだ。所詮生きた者に私を退けることはできぬ」

「生きた者か」

彼はここにも反応を示した。

「また妙なことを言うな」

「何、それは生きた者の主観に過ぎない」

霧はこう言葉を返した。素っ気無い態度であった。

「生きた者には生きた者の世界がある」

「そして死んだ者にも」

「そういうことだ。では私の正体がわかったな」

「ああ。貴殿は死霊だ」

速水は言った。

「船に取り憑く死霊だ。違うか」

「如何にも」

答えながらその身体を実体化させていく。

「私は海に生きていた。そして死んでからも」

「海にいるというわけだな」

実体化というよりは人間であった時の姿をとったと言うべきだろうか。そこには十七世紀頃の西欧の服を着た蒼ざめた顔の男が立

っていた。濃い髭を生やしその目は青い。だがその髭にも目にも生氣らしきものは見られない。動きもせず、ただそこにあるだけである。色の薄い唇も開きはしない。まるで絵の様に。

服は黒いマントに上着、そして薄茶色のズボンと焦茶のブーツであった。上着の白いカラーが目立っていた。だがよく見ればそのカラーも所々汚れていてしかも破れている部分すらあった。

「その通り。何百年もな」

「船を転々として彷徨っていたのか」

「そうだ」

死霊は答えた。

「海から離れられぬのならば。船にいればいい」

そしてこう言う。

「永遠にな。そして私は海の男であり続けるのだ」

「迷惑な話だ」

速水はそれを聞いてこう述べた。その右目で死霊を見据えている。「生きている者にとっては。ここは生きている者の世界なのだから」

「死んでいる者には用はないと言いたいのだな」

「その通りだ。そのせいで生きている者が迷惑を被る」

「そんなことは私の知ったことではない」

死霊は言い返した。

「私がここに在る為に。少し命等を拝借させてもらっているだけだからな」

「命をか」

「そうだ」

「だからあの客船で船員達の体調がおかしくなったのだな」

「あの客船はよかった」

死霊は全く表情を変えずに述べた。ただ声だけが笑っていた。

「糧が多かった。おかげでこうして力を取り戻すことができた」

そう言いながら右腕を掲げる。するとその手に青白い炎が宿った。「行くぞ。降りかかる火の粉は払う」

「生憎私は火の粉ではない」

速水はこう答えながら身構える。その周りをタロットカードが舞う。

「退魔師だ。さっきも言ったな」

「一度聞いたことは忘れない主義だ」

死霊はまた言葉を返す。

「そして私に害を加える者は」

言いながら腕を振り下ろす。

「我等の世界に来てもらう」

そしてその手に宿る炎を宿った。そしてそれで速水を襲う。

速水は左に動いた。そしてそれで炎をかわす。

「速いな」

「生憎場慣れしているので」

軽口を叩いた。

「この程度ではね」

「そうか。ならばやり方を変えよう」

死霊はそう言うと言腕の動きを止めた。

「実体的な攻撃が無駄ならば他に方法がある」

「むっ」

それまで微動だになかった死霊の青い目が動いた。そして速水を見据えてきた。

「来い」

そして速水に対して言った。

「私の側へ。そして我等の仲間となるのだ」

「我等の仲間に」

「そうだ。そして永遠に生きる者の世界と別れるのだ」

「生きる者の世界と」

速水の右眼から光がなくなった。そしてフラフラと死霊の方へ歩いていく。

「さあ、もうすぐだ」

死霊はまたしても言った。

「死せる者の世界まで」

確かにもうすぐであった。速水は死霊のすぐ側にまで来ていた。あと一歩で死霊の手が届く範囲にまで達する、そうしたところにまで来ていた。

だがそれは全てまやかしであった。速水は急に上に跳んだ。
「むっ!？」

「生憎私はまだこちらの世界に未練があつてね」

右目で死霊を見据えていた。見ればその目には光が戻っていた。

「そうおいそれとそちらの世界に行くわけにはいかないのだ」

「私の術が効かなかったのか」

「言った筈だ、私は退魔師だと」

彼は死霊を見下ろしながら言う。

「そちらの術には抵抗があつてね」

「面白いな、それは」

死霊はそれを聞いて笑った。

「ではそれをもっと見せてもらおうか」

「無論そのつもりさ」

彼は空中で姿勢を整えながら言う。

「そしてあちらの世界に帰ってもらおう」

「帰るつもりがないと言ったら？」

「貴殿に拒否権はない」

彼はなおも言い返す。

「ここは生きる者の世界なのだから。死せる者の世界ではない」

「ではやってみるがいい、私を送り返すことを」

「言われずとも」

身体周りのタロットカードの動きが速くなった。

「見せてやる、速水丈太郎の術を」

「それで私を送り返せるのなら名」

タロットカードが舞い降りた。そして死霊に襲い掛かる。

「フン、何かと思えばジプシーのカードか」
彼はそのカードが何かを知っていた。

「この国でも使っていたのだな、祖国だけでなく」
どうやら彼はジプシーもタロットも知っているようである。

「日本ではタロットもよく使われる」

速水は彼に対して言う。その間にカードは一直線に死霊に襲い掛かる。

「ジプシーでなくともな。誰でも使うことができるのだよ」

「靈感を持っていればか」

「そうだ」

彼は答えた。

「それはいいことだ。ポルトガルではそうではなかった」

「ポルトガルでは」

「あの時の我が国は教会があまりにも強くてね」

唇を開くことも動かすこともなく述べる。ただ目だけが動いていた。だがその目はあくまでカードに向けられている。彼は速水すら見てはいなかった。だがそれでも彼の姿も見えているようであった。おそらく目では見てはいないのだろう。

「占いは法度だったのか」

「そんな時代からいたのか」

「そうだ。あの時はよかった」

彼は言った。

「海へ行けば何でもあったのだ。栄誉も富も何もかもな」

大航海時代である。富を求めて港を後にした者達はそこから多くのものを手に入れた。胡椒に金、そして宝を。またあらたな大地を。大航海時代は野望の時代でもあった。

彼もまたその中にいたのだ。そして野望と栄光、そしてそれに従う富を求めている。だがそれは大きなリスクを伴っていたのであった。

「生憎それに失敗してしまっただけ」

「そうか」

速水は彼がどうして死者の世界の住人となってしまったのかこの時わかった。

彼はおそらく航海中に海の中に沈んでしまったのだ。そして死んだ。だが海のことを忘れられず今もこうして生者の世界にその心を置いてしまっている。死者の世界にいながらその心を生者の世界に置く死霊となってしまったのだ。

「そして今こうしてここにいます」

「海を求めてか」

「ただ海が好きなのではないかな」

「野望をまだ追っているのか」

「違う」

彼はそれを否定した。

「私は気付いたのだ。野望よりも海が好きなのだ」と

「そうか」

速水はそれ自体はいいと思った。

「海に永遠にいたい程だ」

「それで生きている者に迷惑がかかってるか」

「生きている者のことは知らぬ」

彼はそれは無視した。

「私は死んでいる。ならば生きている者のことはどうでもよい。違うか」

「それはエゴイズムというものだ」

速水はそれを否定した。

「貴殿がここに留まればそれだけで多くの者に危害が及ぶ。それでもよいのだな」

「構わぬ」

彼は言い切った。

「私が海にさえいられればな」

「わかった。では話はいい」

速水も話を打ち切った。

「闇に帰れ」

その声と共にカードが死霊に突き刺さった。だがそれは死霊の身体を通り抜けてしまった。

「ムッ!？」

「霊体も傷つけられるカードか」

着地した速水の後ろから声がした。

「よいものを持っている。どうやらこれまでの退魔師とは少し違うようだ」

そう言いながら速水の首に手を伸ばしてくる。

「グッ」

そして掴んだ。まるで氷の様に冷たい感触が彼の首を覆った。

「だがこうしてしまえばカードも使うことはできない。違うか」

彼は問うた。

「所詮生者が私を倒すことはできぬ。このまま我等が世界に引き摺り込んでくれようぞ」

「カードを使うことはできないか」

速水は喉を締められながらもまだ声を出してきた。

「違うともいうのか」

「そうさ、違う」

彼は余裕のある声でこう返した。

「私のカードは特別だね。私の意志で自由に動く」

「何っ」

「監察が足りなかったな。今のカードの動きを見て気付かなかったか」

ニヤリと笑って言う。そして消えた。

「!？」

「そして私の術はカードだけではない」

その氷の様な手から離れた。そして死霊の前に姿を現わした。まるで影の様に。

「こうした術も使える」

「攻めるのも守るのもできるというわけだな」

「そうだ。もっともこれだけではないがな」

右目で死霊を見据えながら言う。

「行くぞ。覚悟はいいな」

「それは本来私の言葉だがいい。ではどうするのだ」

「こうする。今度はどうだ」

またカードを飛ばしてきた。今度は二手である。

「どちらにしろ同じこと」

消えた。それでカードをかわした。

「この程度か」

何処からか声が聞こえてきた。また姿を消したようである。

「さて」

しかしその言葉にはとぼけてきた。

「私とて同じことを二回する程芸がないわけではない」

「負け惜しみにしか聞こえぬが」

「その証拠にカードの数を見てもることだ」

「カードを」

「そうだ。タロットの大アルカナは二十二枚」

これは決められた数である。これより多いことも少ないこともない。これはトランプと同じである。

「だが私が投げたカードは二十枚」

「二十枚」

「そう。そして残る二枚のカードは」

左手をさっと前に出す。

「ここにある。そして……」

右目が横に動いた。

「そこだっ」

右にカードを投げた。その先に何がいるのかわかったうえで投げた。

「グハッ」

声がした。そして死霊がその姿を現わした。彼の胸に皇帝と女帝のカードが突き刺さっていた。

「やはりそこだったか」

「わかっていたのか」

「声と気配でわかった」

彼は答えた。

「靈感でな」

「そういうことか」

死霊は相変わらず表情のない、仮面の様な顔でその言葉に応えた。

「侮ったか、またしても」

「さて、ここで決着をつけるか」

「生憎だが今は私は倒せぬぞ」

「どういうことだ」

「あれを見よ」

彼はこう言って上を指差した。そこには月が出ていた。おぼろな黄色い光を放っている。それは十日月であった。

「月か」

「私は満月の時以外にはあちらの世界に完全に帰ることはできぬぞ。今ここでは決して帰ることはない」

「呪いか」

「そうだ」

彼は答えた。

「死霊となり生きる者の生氣をはじめて吸った時にな。同時に受けてしまったのだ」

掟を犯せばそれだけで報いがある。彼の呪いはそれであったのだ。

「私を倒したいのなら満月の時に来るがいい」

彼は言った。

「その時に。また会おう」

そう言い終えると姿を消した。そして彼はそのまま姿も気配も消

し去ってしまったのであった。

「消えたか」

速水はそれを見届けて一言呟いた。

「とりあえずは満月まで待つか」

腕を一振りあげるとカードが舞う。そしてその手の中に収まるのであった。

こうしてこの夜の戦いは終わった。彼は朝になると艦長に対して夜の話を話した。

第六章

「満月の時にですか」

「はい」

彼は答えた。

「その時まで。暫く待つて頂けませんか」

「私の方は構いません」

艦長はそれを認めた。

「どのみち私達にはどうこうすることもできないのですから」

「それでは宜しいですね」

「はい。全ては貴方にお任せします」

「わかりました。それでは」

「はい」

この話で次の満月まで待つことにした。だが彼はこのまま待ちはしなかった。まずはカードを収め、そして何かと準備をはじめたのであった。

彼は艦を出ることが多くなった。この艦が敵の根城である以上これは当然であった。用心に用心を重ねたのである。そして何かと策も練っているようであった。

「流石に何かは話しては頂けませんね」

「申し訳ないですが」

艦長にもこう答える。

「今はね。次の満月まで」

「わかりました」

「ところで一つお伺いしたいのですが」

「何でしょうか」

「ベースは何処でしょうか」

「ベースですか」

「はい」

「それならここからすぐですよ。横須賀中央駅から」
艦長は説明をはじめた。

「まっすぐ行けば突き当たりにありますから。行かれるのですか？」

「はい、今度の土曜にでも」

彼は答えた。

「戦いの前に。英気を養っておこうと思ひまして」

「それはいいですね。一度行かれるといいです」

「わかりました、それでは」

「ベースの他にも色々歩かれるといいですよ」

「他にも何かあるのですか？」

「ここはいい街でしてね」

艦長は朗らかな顔になった。

「三笠もあれば私の母校もありますし」

「防衛大学校ですか」

「ははは、そうです。あそこでは何かと泣きましたがね」

何か懐かしいものを思い出す顔になった。

「今となっては。いい思い出ですよ」

「そうなのですか」

「はい。まあその他にも遊ぶ場所は一杯ありますし」

「遊ぶ場所も」

「カラオケも飲み屋も大分ありますよ。まあ楽しんで来て下さい」

「それでは」

「はい」

こうして彼は土曜日横須賀の街に出ることになった。駅を降りるとまずとはあるギタリストのことが目に入った。

「ああ、彼か」

かつて伝説のバンドと謳われたグループのギタリストである。解散後突如謎の自殺を遂げてしまう。その不世出のギターは今でも多くの者の心に残っている。

それを見ながら駅を降りる。そして街に出た。

街には大きな道が一本通っていた。そしてその左右に店が並んでいる。綺麗な商店街であった。

そこを見回りながら道を進んでいく。色々な店がありそれだけで目を奪われる。

「想像以上だな」

その街並みを見た感想であった。ここまで見事な街だとは流石に思わなかった。歩いているだけで何か海を感じる。そう、目の前にはその海もあったのだ。

その海を見ているうちにベースにやって来た。門で守衛に身分を示して中に入る。少し金を両替した後で言われた建物に入った。

中には少しサイケデリックな模様で世界地図が描かれていた。それはとても自衛隊にあるものではなかった。それだけでここがアメリカ軍のものであるとわかった。少なくとも自衛隊の雰囲気とはまるで違っていた。

「ハロー」

擦れ違った金髪の若い男が声をかけてくる。

「見掛けない顔だね。ジャパンの人かい？」

「はい」

その若い男が日本語を話したのを受けて彼も日本語で挨拶を返した。

「ここの食事が美味しいと聞いたので。それで来ました」

「日本人でそんなことを言うのは珍しいな」

「そうですかね」

「案外日本人ってやつは繊細だね。うちの食事は舌に合わないって言うんだ」

「そうなのですか」

「まあそれは置いておいてだな。楽しんでくれよ」

「はい」

「少なくとも値段は安いから。ビールでもワインでも好きなのを飲んでくれ」

「わかりました。それでは」

「おう、またな」

気さくな挨拶であった。悪い印象は受けない。アメリカ軍は荒っぽい者が多いとは聞いていたが少なくとも彼からはそうした印象は受けなかった。やはり人によって違うということだろう。

レストランに入った。白を基調とした清潔な店内であった。前には話通りバイキングが置かれていた。

それを注文する。同時にワインも。そして気に入ったものを取る為に席を立った。

料理はかなり豊富であった。サラダもスープもかなり揃っている。ハムやハンバーグもあった。彼はその中からレタスとトマト、オニオン、コンソメスープ、そしてソーセージとハンバーグをとって食事をはじめた。丁度テーブルに戻った頃にワインが運ばれてきた。注文した通りの赤であった。

料理の味はかなりよかった。アメリカの料理は大味だという噂だったが少なくともこのベースのレストランのそれは違っていた。味付けは意外と細かく、そしてよかった。

「ふん」

思ったより美味しくて気分がよくなった。ワインもよかった。あまりよかったのでさらに食べ、そしてワインももう一本注文した。こうした時酒に強い自分の体質に感謝すること限りなかった。

程なく食事を終えベースを後にする。流石にワインを二本も飲んだのは効いた。ベースを出たところで足が少しふらついてしまった。「おっと」

慌てて態勢を立て直す。その時に顔の左半分を覆っている髪を抑えた。

「危ない危ない」

顔の左半分が出なかったことに安心しつつ姿勢をとりなおす。そして横須賀の大道に戻りそこで本屋やカラオケ屋に入り英気を養うのであった。カラオケから出た時にはもう真夜中であった。

「早いですね、時間が経つのは」
気付いたら夜になっていたことに思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「さっきまで太陽が世界を照らしていたというのに」

だが今は月が世界を照らしていた。太陽の燦燦とした光ではなく落ち着いた朧な光で夜の世界を支配していたのであった。

「月ですか」

速水はその月を見た。見ればもうすぐ満ちようとしていた。

「もうすぐですね」

彼は呟いた。

「満ちるのは」

月を見る右目の光が変わった。強く鋭いものとなる。

そして髪に隠されている左目も。それは見えはしないが右目とはまた違った不思議な光を放っていたのであった。だがそれを知る者は彼以外にはいなかった。

そのまま歩いて港にまで戻り艦に入る。そして英気を養え終えた彼は満月の日の戦いに心を備えさせるのであった。

「いよいよですね」

その満月の日になると艦長が彼に声をかけてきた。

「今日ですか」

「はい」

彼は答えた。もうその顔には余裕も遊びもなかった。

「健闘を御祈りします」

一言であったがそれで充分であった。戦場に身を置くことも考えられる人の言葉である。一言といえどそれには他の者が口にする場合とは比較にならない重みがあった。

彼はこの日部屋から出なかった。そのまま何かを養っているようであった。部屋には誰も近付かずそのまま時間が過ぎた。そして遂に夜となった。

第七章

「消灯」

その声がすると彼は部屋を出た。そして影の様に音もなく甲板に出た。行く先はこの前と同じ艦首であった。

世界はあの時と同じであった。濃い紫の帳が世界を覆いその中で波の音と街の灯りが見える。今日は船の汽笛まで聞こえてきた。そして上には満月があり朧な黄金色の光を放っていた。速水はそれを背にして艦首付近の丁度中央に立ったのであった。

普通に見ればただ幻想的な光景である。しかしそれは違っていた。それは彼の顔を見ればすぐにわかることであった。

そしてその仮初めの幻想もすぐに破られた。彼の前にあの死霊があああの時のままで姿を現わしたのであった。まるで影の様に。

「約束通りだな」

「こちらは約束するつもりはなかったがね」

速水はこう返した。

「覚悟はよいか」

死霊は冷たい声で語りかけてきた。

「覚悟、さて」

だが速水はそれにはとぼけてきた。

「何を覚悟するというのか」

「私のいる世界にかわりに行くことだ」

「生憎そんなつもりはなくてね」

彼は軽い調子で返す。

「まだこちらの世界にいるつもりだよ」

「ほう」

「行くのはそちらだ。むしろ帰ると言った方がいいか」

「私がか」

「そう。その為にこの日を選んだんじゃないのか」

「そんなつもりはないがな」

死霊は言葉を返した。

「この日を指したのは誘い出す為」

「私を」

「満月の時私は確かに死者の世界に帰ることができる。だがそれと同時に」

彼は言う。

「私の力が最も大きくなる時なのだ。月の霊力によってな」

「月の」

「左様」

死霊は答えた。確かに月には魔力が備わっている。彼はその力を大きく受けるようである。

「その力でそなたを退けるつもりだ。だからこそ覚悟を問うたのだ」

「そうか。だがいらぬ節介」

速水は言い返した。

「私は今まで霊に負けたことはない。私が負けたのは誰だ」

「生憎貴殿には関係のない話だ」

口の端だけでニヤリと笑って応える。

「詮索は無用だ」

「そうか。ならば聞かないでおこう」

死霊もそれ以上聞こうとはしなかった。

「行くぞ。よいな」

「来るがいい」

速水はそう言いながら左手を顔にあてた。顔の左下に。

「この数日で私も備えはしておいた」

「備え？」

「そう。何故私が顔を隠しているか今教えてやろう」

その声が次第に深いものとなっていく。まるで海に入り込むように。

「私の目は普通の目ではない」

そう言うのと右目も不思議な光を放ちはじめた。

「かつては邪眼と呼ばれたこの目」

左手は次第に上へあがっていく。それと共に髪も上がっていく。

「この目こそ私の力。今その力を解き放とう」

言葉と共に手がゆっくりと上がっていく。そして最後に髪が上に完全に上がった。それと同時に今まで隠されていた顔の左半分が姿を現わした。

そこは顔自体は右半分と変わらなかった。白い、彫刻の様に整った顔がそこにあった。そうした意味では左右対称であった。

だが決して対称ではなかった。それは目にあった。右目は黒であったが左目は金色であった。夜の闇の世界にまるで妖星の様に輝いていた。

「その目は」

「これが私の目だ」

彼は言った。

「この目は全てを見る。そう、何もかも」

「何もかもか」

「この世にないものをな。だからこそ私は占い師になれた」

言葉を続ける。

「そして死者の世界を覗くこともできた。全てはこの目の為にな」

「それで退魔師にもなれたのだな」

「そうだ。それまでには色々あったがな」

そう語ったところでふと顔に陰がさす。

「だがこれもまた貴殿には関係のないこと。この左目は全て異なった世界を見、そして死せる者達を退ける為にある」

「ではその目の力を使うがいい」

死霊は彼を挑発するようにして言った。

「そして私を退けてみよ」

「無論」

速水は動いた。

「だからこそこの仕事を引き受けたのだからな」
左目が輝いた。すると彼は急に姿を消した。

「消えたか」

死霊はそれを確認して呟いた。その態度にはまだ余裕があった。

「それもまた目の力だったのだな」

「そうだ」

姿は見えないが声だけは聞こえてきた。

「この目は私に魔力を与えてくれた」

彼はまた言った。

「その魔力の結果だ。この姿を消すことも。そして」

突如として空中にタロットカードが現われた。そしてそれが死霊を襲う。

「ムッ」

「このカードを使う術も。全てはこの黄金色の目の力だ」

「邪眼の力というわけか。これも全て」

死霊も姿を消した。そしてそれでカードをかわしたのであった。

正確には死者の世界へ一瞬戻ったのであろうが。

「面白い。どうやら今までの者達とは違うな」

「私を侮ってもらっては困る」

速水はまた言った。

「この目もな」

「そうだな。では私も力を見せよう」

死霊はこう言って甲板の中央に姿を現わした。

「この力で。その目も何もかも滅してくれよう」

身体全体にあの青白い炎を出した。そしてそれを艦に撃ちつけた。

「焼けよ」

彼は言った。やはりその顔は全く変わりはない。声の調子だけが変わった。

「生きる世界にいやとも死せる世界にいやとも。この炎からは

逃れられはせぬ」

炎が艦を覆った。死霊はその中心に立っていた。

「これなら逃れられまい」

死霊は立ち上がりながら述べた。その顔はぼんやりと前を見ているように見えた。

「この炎は。どちらの世界にしようがそなたを焼き尽くすぞ」

「それはどうか」

だがそこで上から声がした。

「炎を避ける場所は何処にでもある」

「何っ」

死霊は上を見上げた。するとそこに彼が立っていた。

速水は空中に一人立っていた。その白いコートに手を入れて悠然と死霊を見下ろしていた。

「空か」

「そうだ」

彼は答えた。

「私は空にも立つことができるのだ。浮遊術というやつだ」

「それまで知っていたのか」

「驚くことはない。基本中の基本だ」

彼は静かな声でこう言った。その顔は死霊を見下ろしていた。

「違うのか。そちらの世界では」

「くっ」

「どうやら貴殿は空には弱いようだ」

速水は死霊を見下ろしたまま言う。

「海に心がある為。もう一つの青の世界には来ることができぬか」

「空なぞ」

彼は呻く様に言った。だが顔は変わりはしなかった。口さえ開かない。

「何もない場所だ。だが海は違う」

「違うというのか」

速水の身体も死霊の姿も青白い炎が照らしていた。今二人は下からその光に照らされていた。速水の青い服も白と赤のコートも死霊の黒い服も全てその青白い光を映していた。それが死霊の表情のない仮面の様な顔も速水の白面に黄金色の目も映し出していた。今二人は夜の闇の中にその青い光を浴びて対峙していた。

「そうだ、違う」

死霊はまた言った。

「空には何もない」

「何もないか」

「何があるというのだ。あるのは雲と」
言葉が続ける。

「雷だけだ。全てを滅ぼす雷だけだ」

「全てを滅ぼすか」

速水はその言葉にあるものを見ていた。

「それ以外には何もない。空には何一つありはしないのだ」

「だが海にはある」

「そうだ」

死霊は答える。

「だからこそ私はここにいる。全てが存在する海に」

「貴殿が海を愛しているのはわかった」

速水はそこまで聞いて答えた。

「だがな。ここは生きる者の世界だ。死せる者の世界ではない」

冷たく、抑制の効いた声で語る。

「それはあちらの世界で言うのだな。少なくともここで言うことではない」

「今更その様なことを」

死霊は聞き入れようとはしない。

「言おうとも無駄なことだ。それは私を倒してから言うのだな」

「ではそうさせてもらおう」

速水は答えた。

「今ここで倒してな」

「フン、戯れ言を」

「戯れ言だと思うか」

「言った筈だ、私は満月の時に強くなると。見よ」

青白い炎の力が強くなった。

「これが私の力だ」

艦どころか海までもが炎に包まれた。

「この炎で。御主を焼いてやる」

「冥府の炎でか」

「そうだ。魂を焼き尽くすこの炎で。今そこまで燃やしてやる」

「迷惑なことだな」

速水は足下に迫る炎を見下ろして呟いた。

「幸い他の者に害はないにしろ。ここまで派手にやられると」

「滅びるのだ」

「そもそもこんなものは冥府の炎ではない。本当の冥府の炎とは表情が変わった。

「黒いものだ。それを知らないとはまだまだ甘い」

「何だと」

死霊はその言葉に対して問うた。

「黒い炎だと」

「そうだ」

速水はニヤリと不敵な笑みを浮かべていた。そして言う。

「見たことはないようだな。その炎を。ならばいい」

言いながら身構える。

「それは幸いだ。何故なら絶対的な恐怖を知らないのだから」

「絶対的な恐怖」

「わからないならいい。だがそれはあちらの世界で知ることになる」

そう言いながら左腕をゆっくりと動かす。そしてそこに左目から放たれる黄金色の光をあてる。

「先に死んだ者達からな。私ができるのはそちらに送ること」

光が腕に満ちた。すると彼はそれを下に向けて放った。

「消えろ」

腕が一閃された。すると光は矢となって海に突き刺さった。そしてそれで死霊の炎を全て消し去ってしまった。

「なっ」

「黒い炎ならこうはいかない」

速水はまた言う。

「私が彼女を虜にするにはまだ先のことだろうな、残念ながら」

「またわからぬことを」

「だから言っているだろう。これは貴殿には関係のないこと」

彼は相変わらずであった。

「詮索は無用だ。ではこれで決めるぞ」

「来るがいい」

死霊は炎をまた出してきた。今度は両腕にである。

「その光で私を倒すというのなら」

上を見上げる。そして構えていた。

「やってみせよ」

「言われずともそのつもりだ」

また左腕に光を集めてきた。腕がまるで星の様に眩く輝いていく。濃紫の空にその黄金色の光が映えていた。

「滅せよ」

それが極限になったとみるやまた光を放った。そしてそれは先程と同じ様に光の矢となって下に向けて放たれる。それは一直線に死霊に向けて襲い掛かる。

「この程度で」

死霊は呻いた。そして両手を上にかざす。その手に宿らせている炎で防ぐつもりであった。

光と炎が激突した。両者は拮抗しているように見えた。だがそれは一瞬のことであった。

炎が消えた。まるで霧の様に煙を立てて消える。そして遮られる

ものを消し去った光はそのまま死霊に向かって降り注ぐ。死霊はそれをまともに受けてしまった。

「ぐはっ」

苦悶の声が漏れる。だが顔は変わりはない。やはり彼は声だけで苦悶をあげていたのであった。

「これで決まりだな」

速水は下を見下ろしたまま言った。

「全ては終わった。その光を受けて退かぬ異形の存在はない」

ゆつくりと下に降りながら言う。

「違うか。最早この世界に留まっていられぬだろう」

「確かに」

もう今にも消え入りそうな声となっていた。死霊はその声で言う。「どうやら。私はこのままこの世界を去らなければならないようだな」

「そうだ。どうやらこの左目には貴殿も適わなかった様だな」

「うむ」

彼は頷いた。

「上からそれを放つとはな。生憎私は空には弱い」

「それが」

速水は完全に艦に降りてきた。そして死霊と対峙した形で問う。

「空が嫌いなようだが。何があった」

「さっき言ったな」

「雷か」

「そうだ。私の乗る船は雷により沈められた。嵐の夜にな」

昔はこうしたこともあった。木製であり避雷針もない船は落雷に對しては対処する術を持ってはいなかった。従ってそれを受けたならば炎に包まれて沈むしかなかったのである。

「それ以来。空を恨んできた」

「空をか」

「だからこそ海に留まっていたかった。忌まわしい雷の支配する空

ではなく全てを包み込んでくれる優しい海にな」

声が温かいものとなってきた。

「もうここには留まってはもらえぬが。だがあちらの世界では」

「行くがいい」

速水は感情を込めずに言った。

「本来はそこへ行く筈だったのだからな」

「本来はか」

死霊の声はもう消えようとしていた。

「そうか。そうだったな」

「数百年の妄執を捨てて。消えろ」

「消えるとするか。最早話すこともできなくなってきた」

その言葉通り声はさらに小さくなった。

「それでは。異界の者は消えるでしょう」

その姿がすうっと消えていった。まるで影の様に。そして霊気も。

速水はそれを感じて死霊が完全にあちらの世界に行ってしまったことを感じていた。

「これで終わりだ」

彼は最後に呟いた。

「数百年の海への思いも。一条の光で消える」

呟きながら懷から何かを出す。

「終わった。今一つの魂が還った」

それはタロットのカードだった。死神のカード。全てを無に還す死のカードが全てを現わしていた。こうして速水と死霊の戦いは幕を降ろしたのであった。

第八章

契約通り仕事を終えた速水にはもうここに留まる理由はなかった。程無く艦を去ることになったのであった。

「それでは」

彼は次の日の朝に昨夜の戦いの状況を艦長達に話し、横須賀を後にすることにした。なお左目はまだ隠している。

「いえ、それはお待ち下さい」

だがここで待ったがかかった。

「もう仕事は終わりの筈ですが」

「いえ、御礼がありますので」

艦長はにこやかに笑ってこう述べた。

「御礼？」

「はい、夜になればわかります」

艦長の様子は何か隠している様子であった。速水はそれを見て何か妙なものを感じていた。

「何か御考えですか？」

「ですから夜になればわかりますので」

艦長はそれでもまだ言った。どうも悪いことではなさそうなので速水はそれに従うことにした。こうして彼は夜まで待った。その間ずっと部屋にいてぼんやりとしていた。

夜になり夕食も終わって大分経つと扉をノックする音が聞こえてきた。

「どうぞ」

入るように言うと艦長が入って来た。彼の後ろにもう二人いた。

「そちらは」

「この艦隊群の司令です」

階級は海将補であった。自衛隊の中でもかなり階級が高い。

「そして私は横須賀のこの基地の司令です」

彼もまた海将補であつた。何と昔で言う提督が二人並んで彼のところにやって来たのだ。

「またどうしたのですか」

「自衛隊の恩人に挨拶に参りました」

彼等はこう述べた。

「挨拶」

「はい。死霊を倒してくれましたね」

「それが仕事でしたから」

彼は戸惑いながらも答えた。いきなり海上自衛隊の最高幹部達がやって来て戸惑いを隠せなかったからだ。

「大したことは」

「それでそれへの御礼でして」

「報酬はもうかなりもらっているのですが」

「報酬とはまた別にです」

基地司令が述べた。

「外に出て下さい」

「外に？」

「はい、海上自衛隊からの御礼がありますので」

何か、と思った。彼は海上自衛隊のことはそれ程知っているわけではない。だから彼等が何を考えているのかわかりかねていたのである。

「それでは」

「はい、どうぞ」

その司令達が案内する。彼等に案内されて速水は艦の外に出た。

「我々は御礼は欠かさない主義でして」

司令はにこやかに笑ったまま言う。

「そしてそれは」

「もう帰られるのですよね」

「はい、まあ」

彼は答えた。

「まあまずは外へ」

「わかりました」

彼は言われるまま艦を進む。そこでは乗組員達が自衛隊の礼装に着替えて並んで待っていてくれた。

「海上自衛隊の恩人に対し敬礼」

「敬礼！」

号令と共に彼に向けて一斉に敬礼が向けられる。それは闇夜の中からもはっきり見えた。

「何と」

「私なぞの為に」

「言った筈ですが。恩義は返すと」

「いえそれでも」

「それでは最後の仕上げです」

まだある。今度は何だろうと思った。

「帽振れ」

「帽振れーーーーーっ！」

「お別れの挨拶です」

「何か最高の気分ですね」

もう速水は自分が受けている礼に対して言葉を失ってしまっていた。

「本当に。ここまで」

「またいらして下さい」

司令が最後に声をかけてきた。

「できれば今度は御客様として。仕事ではなく」

「はい」

彼は笑顔で基地を歩いていった。振り向かずともその背に果てしない感謝と祝辞を浴びながら。それを後ろから横須賀の夜の世界を後にするのであった。

占術師速水丈太郎 横須賀の海にて

完

2006・1・23

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5369a/>

占術師速水丈太郎 横須賀の海にて

2010年10月8日15時29分発行